

寺院名	智 恩 寺		寺院番号	⑩
所在地	大字鼎			
居住状態	無住	各種文化財 員 数	種 別	個 数
指定文化財	良薬山智恩寺跡（市史跡） 智恩寺国東塔（県有形）		木 造 建 築	2
			礎 石 跡 等	
			石 造 物	1
			仏 像	3
			美 術 品	
			古 文 書	
		そ の 他		
特筆すべき 文化財	・ 宝塔（写真No. 11）	・ 講堂（写真No. 19）		
	・ 薬師如来坐像（写真No. 20）	・ 日光月光菩薩（写真No. 20）		
	・ 十二神将（写真No. 20）	・ 観音堂（写真No. 27）		
寺院 管理状況	<p><文化財管理状況及び聞き取り調査概要></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 聞き取り調査及び寺院の管理状況については、鼎地区在住の安部百合子氏に協力して頂いた。 ・ 寺院は、地区の方々により管理されているということである。また、旧正月3日には長安寺住職を招き護摩行などを行っており、その際には鬼会の面も飾られるということである。 ・ 以前は、古い絵馬などが講堂内に存在していたということである。 ・ 本尊である薬師如来像や十二神将像などは講堂内のガラスケース内に安置されている。 			
寺院史概略	<ul style="list-style-type: none"> ・ 六郷山寺院の成立・推移について、 <ol style="list-style-type: none"> ①平安時代前半までに宇佐八幡に近い来縄郷を中心とした地域に寺院が建立される。 ②永久元年（1113）に六郷山は天台無動寺と号し、さらに保安元年（1120）に延暦寺への寄進に伴って宗教的な整備が行われる。 ③安貞二年（1228）に関東祈祷所となり蒙古襲来時の異国降伏の祈禱を契機として施設の整備が行われる。 以上の三段階を経て整然とした三山形式の六郷山が形成されたと推測されている。 ・ 発掘調査の結果、出土した9世紀代の瓦類は寺院としての上限を示す可能性が高いとしている。13世紀後半～14世紀は「寺屋敷」地区等で施設が築かれ、六郷山寺院として体裁が整うとされている。また、現状で確認できる遺構は中世末に形成された可能性が高いとしている。この結果は、上記①③段階に該当するが、②段階は明確ではなく課題である。 ・ 鎌倉時代初期に大友氏が来縄郷を獲得して以来、一族である小田原氏が管理し、その系統の良範が院主となる。良範の後は、子息の永範、孫の範秀と伝えられる。 ・ 院主の系譜は、『宇佐宮宮迫山学頭坊代々名帳』に「妙秀 明徳三年（1393）補任 智恩寺住侶」と見えるが、智恩寺のE地点に残る天文二十四年（1555）の宝篋印塔にある「法印豪秀」までは不明となる。 ・ 豪秀の後は盛秀の名が天正四年（1576）の『屋山法華三昧輿所再興表白文』に残るが、これが院主名の分かる最後となる。ただ、文禄元年（1592）に朝鮮出兵した大友軍の将兵の名を連ねた注文中には「智恩寺」と寺名のみが記されている。特異な形態であり、僧侶ではと推測されている。 ・ 近世段階では、智恩寺の活動を記した古文書が無く、正式な寺院として認められていなかったと思われる。しかし、E地点に少ないが5基の院主と思われる墓碑が残されている。 			

寺院現況及び変更点

・平成25年度の調査では、智恩寺境内を中心として、図に記してある1～13の石造物群及び六所権現・講堂について現況確認を行った。平成26年度では、さらに追加の調査を行い、発掘調査の成果についても記載した。

〈石造物の調査〉(図版②：智恩寺周辺地形測量図参照)

A地点. 五輪塔

・山林のほぼ中央部において五輪塔の地輪と思われる部材と礫の集積を確認した。(写真No.1) その他の部材に関しては、現状では確認できなかった。

B地点. 五輪塔

・A地点の山林との境部分において、やや埋没した五輪塔の空風・火輪の部材を確認した。(写真No.2)

C地点. 確認できず

・以前の調査においても、五輪塔は確認されていない。今回の調査でも五輪塔等の石造物は確認できなかった。

D地点. 五輪塔群

・農道から竹林の中に10mほど入った地点に、塚状の高まりがあり、3基ほどの五輪塔を確認した。確認した部材は、火輪と思われる部材が2点、空風輪・火輪・地輪は確認できるが、水輪が確認できないものが1基みられる。(写真No.3)

E地点. 石造物群

・D地点の南側約70mの竹林内には、智恩寺の歴代院主の墓所が位置している。この地点では、宝篋印塔1基・宝塔3基・板碑1基・角柱塔婆1基・五輪塔2基・無縫塔1基・位牌型墓碑3基・自然石墓碑1基が確認されている。宝篋印塔は天文二十四年(1555)銘で、「法印豪秀記之」と院主の名前が刻まれている。(写真No.4) 資料として使用した『くにさきの世界～くらしと祈りの原風景』に記載されている写真と比較すると荒廃が進んでおり、倒木などが目立つ。(写真No.5)

F地点. 五輪塔

・土塁状の高まりに、やや埋没する形で五輪塔の残欠を確認した。現状で確認できるのは、火輪と地輪と思われる部材が1点ずつである。(写真No.6)

G地点. 五輪塔

・五輪塔の水・地輪と思われる部材を確認した。(写真No.7) 周辺に、その他の部材は確認できなかった。

H地点. 一石五輪塔

・畑境の段上に一石五輪塔を1基確認した。(写真No.10) 周辺にその他の石造物はみられなかった。

I地点. 宝塔塔身部分

・残存している宝塔の塔身部分に、別の石塔などの笠部材及び台座を組み合わせて設置している。(写真No.11)

J地点. 国東塔

・国東塔が1基存在している。(写真No.12) 安山岩製で、総高294cm、無銘である。相輪・笠・塔身・請花・反花・基礎・基壇二段の各部位によって構成される。南北朝前半～中頃の造立と考えられている。また、隣接して石幢の柱部より上部部分(龕部?)と思われる部材が存在している。(写真No.13)

K地点. (五輪塔)

・以前の報告書において、五輪塔が1基存在したと報告されている。しかし、今回の調査では、地図上の位置までは確認することができたが、五輪塔自体を確認することはできなかった。(写真No.14)

L地点. 石祠

・新たに石祠2基を確認した。(写真No.15) 周辺は倒木などが目立ち、1基は埋没している状態である。銘文は確認できなかった。

M地点. 一石五輪塔・五輪塔

・今回の現況確認調査において、新たに確認したものである。(写真No.16) 一石五輪塔は横転し五輪塔はやや埋没している状況であった。一石五輪塔について地輪の形状が火輪を反転もしくは逆三角形のやや特異な形状を呈している。また、五輪塔に関しては、空風輪を消失している。

〈堂宇と発掘調査の概要〉(図版②：智恩寺周辺地形測量図参照)

・調査は六所権現・講堂が位置する堂山地区を中心として、寺屋敷地区・西城地区・イヤの谷地区の4地区に丘陵上を分けて実施されている。よって、4地区ごとに報告をおこなう。

1. 堂山地区

- ・丘陵の先端部に位置しており、約80m×約30mの平坦面に講堂と六所権現(写真No21)が配置される。
- ・講堂(写真No19)については、伊藤常足が文化元年(1804)から天保十二年(1841)にかけて製作した『太宰管内志』によると、「南向にして入三間に横四間の堂あり 本尊は薬師如来 傍仏は日光月光なり又十二神将あり」と記載されている。講堂は棟板等が無く、その建築時期は明らかではないが、内陣柱に安永八年(1779)の墨書が残ることからそれ以前であることは確実である。
- ・『太宰管内志』に記された薬師如来・日光月光・十二神将は、現在でも講堂内に安置されている。その他、石造として女神坐像・僧形坐像、鬼会面が4面残されている。薬師如来については室町時代後半頃、日光月光・十二神将については江戸時代後半頃の製作と考えられている。(写真No20)
- ・堂山地区での発掘調査は、①六所権現北側の1段下がった平坦面、②講堂の南側前面、③講堂より鬼会の際に身を清める垢齋取りを行ったとされる清水へと至る道(通称鬼会の道)沿いに位置する自然石が10基並立する遺構が墓地となるか確認するための3ヶ所で実施している。(写真No28)
- ・調査の結果、①では智恩寺創建時のものと考えられる瓦類の包含層が確認されている。点数は少ないが共伴する土師器から9世紀後半と考えられている。また、この瓦類の包含層を切る13世紀中頃から後半にかけての梵鐘の鑄造遺構が検出されている。②では深さ約5cmで岩盤であり遺構・遺物は確認されていない。③では横転している1基の下部を調査し、17世紀代の墳墓となることが確認されている。

2. 寺屋敷地区

- ・以前寺があったと言い伝えられている地区である。講堂・六所権現の平坦面の北側に隣接し、坊跡が展開すると想定される谷状地形であるイヤの谷の延長線上となる立地から院主の居住する院主坊跡ではないかと考えられている。
- ・『太宰管内志』には、講堂より「一町下りて本寺あり入三間に横四間の堂なり本尊は観世音菩薩なり」との記載が残る。この地区に観世音菩薩を本尊とする本寺が江戸時代には存在したと推測されるが、明治二十一年作成の地籍図にその記載は無くそれまでに廃絶したものと思われる。現在イヤの谷に観世音菩薩を安置した観音堂が位置しているが、本寺の廃絶後に造り移したものと考えられている。
- ・調査の結果、南北朝期前後の浅い堀を巡らせた方形区画が形成され、同一地点で戦国期には深い堀によって区画が形成されており重要な施設が存在していたと推測されている。その内部からは3間×3間の掘立柱建物が検出されており、出土遺物からその時期は15世紀前半と考えられる。その規模から中心的な仏堂の可能性が高いとしている。

3. 西城地区

- ・現在でも土塁や堀をみることが出来る地区であり、最も高所にある平坦面は「城の内」と呼ばれている。
- ・調査の結果、戦国時代に整備された遺構の可能性が高いことが確認された。

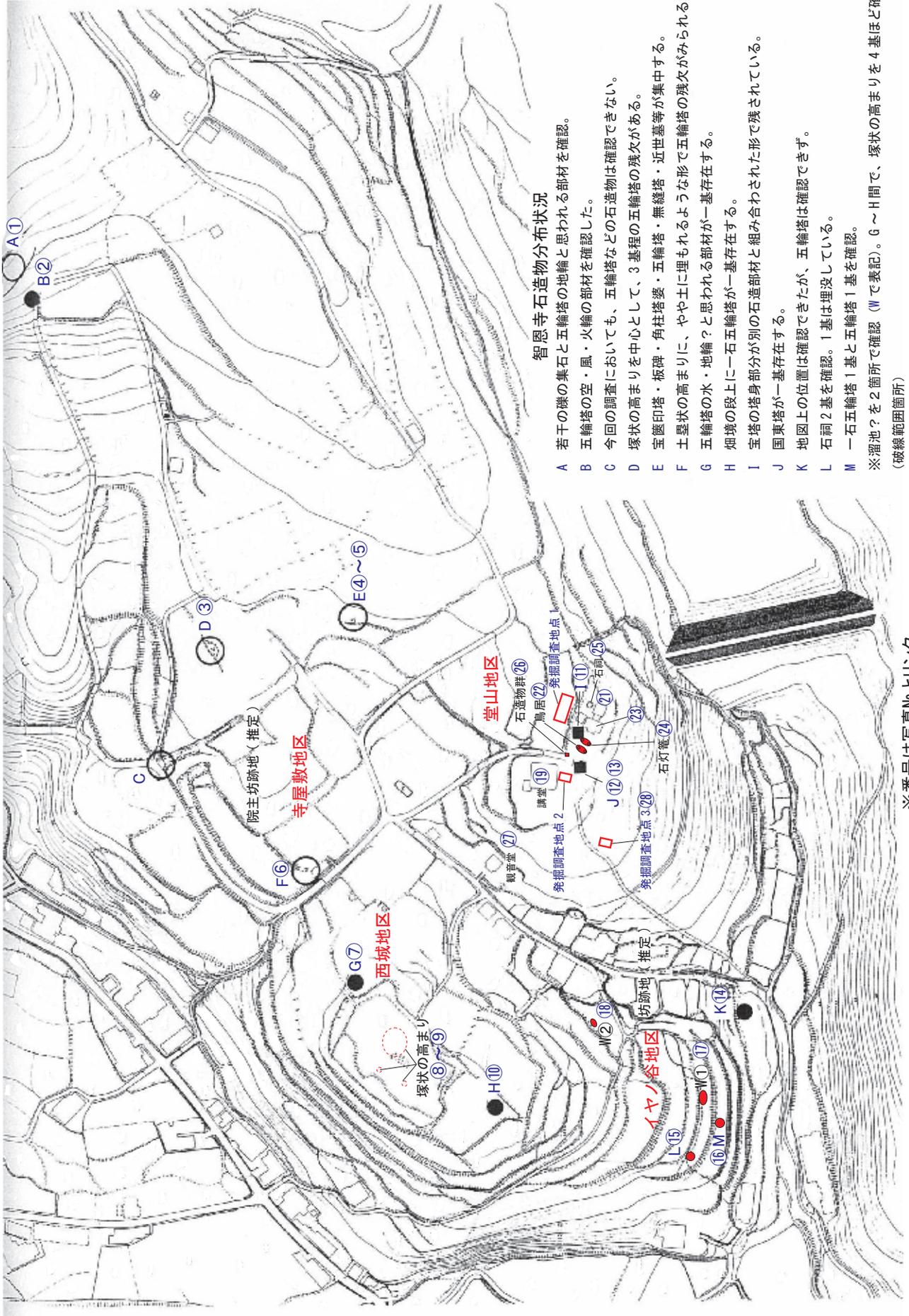
4. イヤの谷地区

- ・この地区は堂山地区と西城地区の間に位置しており、南北方向に細長い谷状地形を呈している。20ヶ所程の平坦面が形成されており坊跡と推定される。

〈主要参考文献〉

- ・『智恩寺』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第9集 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1992
- ・『くにさきの世界一くらしと祈りの原風景』 豊後高田市史特論編 豊後高田市 1996
- ・『六郷満山関係文化財総合調査概要一豊後高田市・真玉町・香々地町の部一』 大分県文化財調査報告書 第37輯 大分県教育委員会 1976

図版② 智恩寺周辺地形測量図



智恩寺石造物分布状況

- A 若干の礫の集石と五輪塔の地輪と思われる部材を確認。
- B 五輪塔の空・風・火輪の部材を確認した。
- C 今回の調査においても、五輪塔などの石造物は確認できない。
- D 塚状の高まりを中心として、3基程の五輪塔の残欠がある。
- E 宝篋印塔・板碑・角柱塔婆・五輪塔・無縫塔・近世墓等が集中する。
- F 土塁状の高まりに、やや土に埋もれるような形で五輪塔の残欠がみられる。
- G 五輪塔の水・地輪?と思われる部材が一基存在する。
- H 畑境の段上に一石五輪塔が一基存在する。
- I 宝塔の塔身部分が別の石造物と組み合わされた形で残されている。
- J 国東塔が一基存在する。
- K 地図上の位置は確認できたが、五輪塔は確認できず。
- L 石祠?基を確認。1基は埋没している。
- M 一石五輪塔1基と五輪塔1基を確認。

※溜池?を2箇所を確認(Wで表記)。G~H間で、塚状の高まりを4基ほど確認した。
(破線範囲箇所)

※番号は写真No.とリンク

文化財の現況・詳細 (1)



1:五輪塔部材 図版②参照/時期: -

- ・ A地点において地輪を確認した。落ち葉などが堆積しており、埋没している印象を受ける。



2:五輪塔部材 図版②参照/時期: -

- ・ B地点において、空風輪及び火輪を確認した。A地点同様に、枯葉などに埋没している。



3:五輪塔部材 図版②参照/時期: 中世か

- ・ D地点において、3基程の部材を確認した。
- ・ 塚状の高まりの上に五輪塔部材が安置されている。



4:宝篋印塔 図版②参照/時期: 天文24年

- ・ E地点において宝篋印塔・板碑・角柱塔婆・宝塔・無縫塔・五輪塔を確認した。
- ・ 智恩寺の歴代院主の墓所と推定される。
- ・ 宝篋印塔には、天文二十四年(1555)、法印豪秀の銘が残る。



5:無縫塔・近世墓碑群 図版②参照/時期: 近世

- ・ E地点の無縫塔・近世墓碑群である。
- ・ 倒木などにより、荒廃している印象を受ける。



6:五輪塔部材 図版②参照/時期: -

- ・ F地点において、五輪塔の火輪を確認した。
- ・ 他の五輪塔残欠に比べ、埋没が著しい印象を受ける。

文化財の現況・詳細 (2)



7:五輪塔部材

図版②参照/時期: -

- ・ G地点において、水・地輪を確認した。
- ・ 竹林のちょうど中央部にあり、比較的確認しやすい位置に立地している。



8:塚状の高まり

図版②参照/時期: 中世か

- ・ 「西城地区」において塚状の高まりを確認した。
- ・ 礫石を集積している。



9:塚状の高まり

図版②参照/時期: 中世か

- ・ 数基の塚状の高まりが存在しており、今後精査の必要性がある。



10:一石五輪塔

図版②参照/時期: -

- ・ H地点において、一石五輪塔を1基確認した。
- ・ 空風輪を欠いている。



11:宝塔塔身

図版②参照/時期: 中世か

- ・ I地点において、宝塔の部材を確認した。
- ・ 笠部には、別の部材が組み合わされる。



12:国東塔

図版②参照/時期: 南北朝前半～中頃

- ・ J地点において、確認した。
- ・ 南北朝前半から中頃にかけての造立である。

文化財の現況・詳細 (3)



13: 石幢

図版②参照／時期：中世か

- ・ 国東塔に隣接して置かれている。
- ・ 石幢の龕部と思われる。



14: K地点現況

図版②参照／時期：－

- ・ 五輪塔が位置していると報告されているが、今回の調査では確認できなかった。



15: 石祠

図版②参照／時期：近世か

- ・ L地点において、石祠が2基確認された。銘文などは、見られず詳細な時期などは不明である。近世であろうか。



16: 五輪塔部材

図版②参照／時期：中世か

- ・ M地点において、確認された五輪塔部材と一石五輪塔である。



17: 溜池 (W①)

図版②参照／時期：近世～近代か

- ・ L地点と同一の段において確認した。寺院との直接の関係は不明である。



18: 溜池 (W②)

図版②参照／時期：近世～近代か

- ・ イヤの谷の中程にて確認された。こちらも、寺院との関係は不明である。

文化財の現況・詳細（4）



19: 講堂 図版②参照/時期：安永8年

- ・内陣柱に安永八年（1779）の墨書が残されており、それ以前の建築である。
- ・本尊は薬師如来である。



20: 講堂内 図版②参照/時期：室町・江戸

- ・講堂内には薬師如来・日光月光・十二神将が安置されている。
- ・薬師如来は、檜材の寄木造りで、室町時代後半頃の製作である。
- ・日光月光・十二神将は江戸時代後半の製作である。



21: 六所権現全景 図版②参照/時期：近世

- ・講堂に隣接して境内が位置している。
- ・鳥居・拝殿・本殿が残る。



22: 鳥居 図版②参照/時期：文久2年

- ・「文久二年（1862）知恩寺村古沢善作 古沢文平 三明権三良 三明芳平 石工大力村 大野寿右衛門基親」銘が残る。



23: 拝殿 図版②参照/時期：近代

- ・2間×6間の建物である。



24: 石灯笼 図版②参照/時期：大正4年

- ・拝殿の前面に石灯笼が2基残る。
- ・大正四年に御大典記念として建立されたものである

文化財の現況・詳細 (5)



25: 石祠

図版②参照／時期：近世か

- ・ 本殿の北側に隣接する。
- ・ 基壇上に石祠が2基残る。右側の石祠には享和年間（1801～1803）の銘が残る。



26: 石造物群

図版②参照／時期：近世

- ・ 六所権現内に石祠や灯籠の台座が残る。
- ・ 灯籠には「奉寄進 文久元酉（1861）四月 三明武右衛門」の銘が残る。



27: 観音堂

図版②参照／時期：昭和60年

- ・ イヤの谷に位置しており、観世音菩薩を安置している。
- ・ 現在の堂は昭和60年頃に建替えられたものである。
- ・ 観世音菩薩は、檜材の寄木造で南北朝期（14世紀前半）の作と考えられる。



28: 墓地跡 発掘調査地点3

図版②参照／時期：17世紀代

- ・ 発掘調査により、自然石で形成された10基の墓碑が確認されている。また、一部に円礫の区画がみられる。内5基は倒れた状態であり、調査では2基のビットが検出され、寛永通寶12枚や人骨の小片などが出土している。
- ・ 時期として17世紀代が考えられる。

寺院名	報 恩 寺		寺院番号	⑰
所在地	大字来縄			
居住状態	無住	各種文化財 員 数	種 別	個 数
指定文化財			木 造 建 築	
			礎 石 跡 等	3
			石 造 物	5
			仏 像	1
			美 術 品	
			古 文 書	
		そ の 他	1	
特筆すべき 文 化 財	・ 仁王像（阿・吽形）（写真No.1.2）	・ 鐘楼門跡（写真No.7）		
	・ 宝篋印塔（旧観音堂地区）（写真No.8）	・ 石灯籠（写真No.9）		
	・ 一字一石塔（写真No.10）	・ 旧観音堂跡（写真No.11）		
	・ 風除権現社及び拝殿跡（写真No.14）	・ 塔ノ隈宝篋印塔（写真No.16）		
	・ 木造十一面観音立像	・ 神功皇后の塔（位牌形）		
寺 院 管 理 状 況	<p><文化財管理状況及び聞き取り調査概要></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在、報恩寺住職により管理されている。木造十一面観音立像や神功皇后の塔（位牌形）は、現観音堂内に保管されており、定期的に大分県立歴史博物館にて燻蒸等が行われている。観音立像等は、旧暦1月10日・7月10日に御開帳していたが、近年は7月10日の時にのみ現観音堂でお経が上げられている。また、観音堂はやや老朽化しており、図面Ⅳ区の石垣周辺も荒廃している。 ・ 周辺の聞き取り調査により、参道入り口下段付近くで確認された鳥居残欠（写真No.17）については、周辺一帯において、以前貴船神社が存在していたということであり、これに関連する可能性が考えられる。周辺を踏査したが、跡地は確認できなかった。 ・ 塔ノ隈宝篋印塔は、旧参道沿いに位置しており、以前は7回参道がカーブしていることから「七曲」（ナナマガリ）と呼ばれていたということである。その他、現報恩寺住職の祖母の時代には、牛に荷を積み、佐野地区側から旧観音堂へ向かう参道が存在していたということである。佐野地区の住民の方への聞き取り調査により、昭和10年～20年頃までは、お弁当を持参して報恩寺がある応利山の山頂まで、登っていたということである。 ・ 現駐車場への入口である来縄地区には、禅宗寺院である泰雲寺が位置している。その駐車場に、周辺の圃場整備に伴い出土した多数の石造物が集積されている。時期は不明であるが、宝篋印塔の笠部材の残欠などが確認できる。 			
寺院史概略	<ul style="list-style-type: none"> ・ 報恩寺の由緒は「養老中仁聞禪師が宇佐八幡の神託を蒙り、神功皇后進福の為、千手観音菩薩の木像を彫したるも、寛永中僧用元なる者、其雨露にさらさるゝを嘆き、一字の草堂を此の地に結びたるも、寛文中僧無方来たりて、精舎を建立し、往年の神託に由り、之を報恩寺と名づく」と云う。云々」とある。（『西国東郡誌』）※中野幡能氏によると平安初期の終わり頃に建立されたのではないかとしている。（中野 1966） ・ 六郷山寺院としての報恩寺の記録が確認できる資料として、安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』（『太宰管内志』所収）の本山分のなかに「大折山本尊聖観音…」と記載されている。建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文』には、寺領が河野四郎によって押領されていると記載される。この河野氏は山香立石の地頭である河野一族と推測されている。また、『定額院主目録』によると「大折山報恩寺院主利益院 衆徒三十六坊なり」との記載がある。 ・ 近世になり延宝年間（1673～1681）に無方和尚が再興し黄檗派の禅宗寺院となっている。この時期の伽藍として『太宰管内志』には、「…寺は南向にして入り四間横六間の堂なり本尊は釈迦如来なり これより一町余登りて講堂あり二間半四面 本尊十一面観音なり」と記載されている。 ・ 大正8年（1919）に観音堂が山火事に遭い消失し、現在地に観音像・堂を移したとされている。 ・ 昭和27年（1952）に再び天台宗に改宗している。 			

寺院現況及び変更点

＜Ⅰ区＞(図版①、②: 詳細位置図・境内地図面参照)

- ・石造仁王像については、以前の調査から大きな変更点はみられない。石段及び手摺等が整備されている。(写真No.1・2)

＜Ⅱ区＞(図版②: 境内地図面参照)

- ・現観音堂北側に南北約30m×東西約40mの平坦面を確認し、平成25年度の調査において図面上に追加した。現在、休憩所及び豊後高田市内を見渡せる展望所となっている。

＜Ⅲ区＞(図版③: Ⅲ区模式図参照)

- ・現観音堂の東南側において、無縫塔を含む近世～近代にかけての院主墓地(写真No.3)、鳥居柱部の残欠(写真No.4)を確認した。柱部には、「奉寄進□□壺字」の銘が残されている。参道入口付近や風除権現手前において確認されている鳥居残欠との関連は不明である。また、Ⅲ区中央部付近において鳥居柱部の残欠をもう1基確認している(写真No.18)
- ・現観音堂の東南側に隣接して約10m×9mと約5.5m×9.8m程の2棟の礎石跡(写真No.5)及び近世陶磁器の散布を確認した。
- ・現観音堂(写真No.6)の南側には、鐘楼門跡(写真No.7)・地蔵像・五輪塔が存在している。岩野勝氏が『豊後高田市における六郷山寺院の信仰と経済的考察について』内で掲載している記録写真には、やや朽ちてはいるが鐘楼門が現存している状況や、茅葺屋根の現観音堂などが確認できる。(岩野1970)

＜Ⅳ区＞(図版③: Ⅳ・Ⅴ区拡大図参照)

- ・来縄地区から参道を登ってくるとⅣ区の入口付近に手水鉢が1基存在しており、そのさらに北側に宝篋印塔1基と石祠1基がある。(写真No.8)
- ・Ⅳ区東側には、石灯笼1基(写真No.9)と一字一石塔1基(写真No.10)が立地している。また、Ⅳ区の中央部に旧観音堂跡の礎石跡が残されている。(写真No.11)
- ・Ⅳ区南側は、石垣で形成されており、南側の山腹から旧観音堂へ向かうように石段が造られている。(写真No.12)

＜Ⅴ区＞(図版③: Ⅳ・Ⅴ区拡大図参照)

- ・風除権現社へ向う石段手前に鳥居の残欠があり、鳥居の笠木・島木部分が半分と、柱部、及び台石と思われる部材が1点ずつ存在している。(写真No.13) 石段を登ると風除権現社とその拝殿跡が立地している。(写真No.14・15)
- ・以前の調査図面内において風除権現社の北側に「石積み」と記載があり、周辺を確認のため踏査した。周辺は大型の礫が多く、集石しているような箇所は確認することができたが、明確に石が積まれているような状況は確認できなかった。

＜参道入り口周辺＞(図版①: 詳細位置図参照)

- ・旧参道は、現参道入口の駐車場の西端より10m程雑木林へ入った所に存在している。また、この地点より50m～60m程南側へ旧参道を登った地点で塔ノ隈宝篋印塔を確認した。(写真No.16)
- ・現参道周辺の踏査を行った結果、現参道入り口から東側に入り50m～70m程小さな沢に沿って下った地点で、鳥居の部材を確認した。部材は、鳥居の笠木・島木部分が半分と、柱を固定するための台石と思われる部材が1点ずつである。また、風除権現の石段手前にある鳥居残欠と部材を比較したが、笠木・島木部分の接合部のサイズが合わず、台石の形状にも違いが見られるため、別個体であると考えられる。つまり、鳥居に関しては、風除権現手前に1基と現参道入口付近に1基存在していた可能性がある。(写真No.17)

◎旧参道について

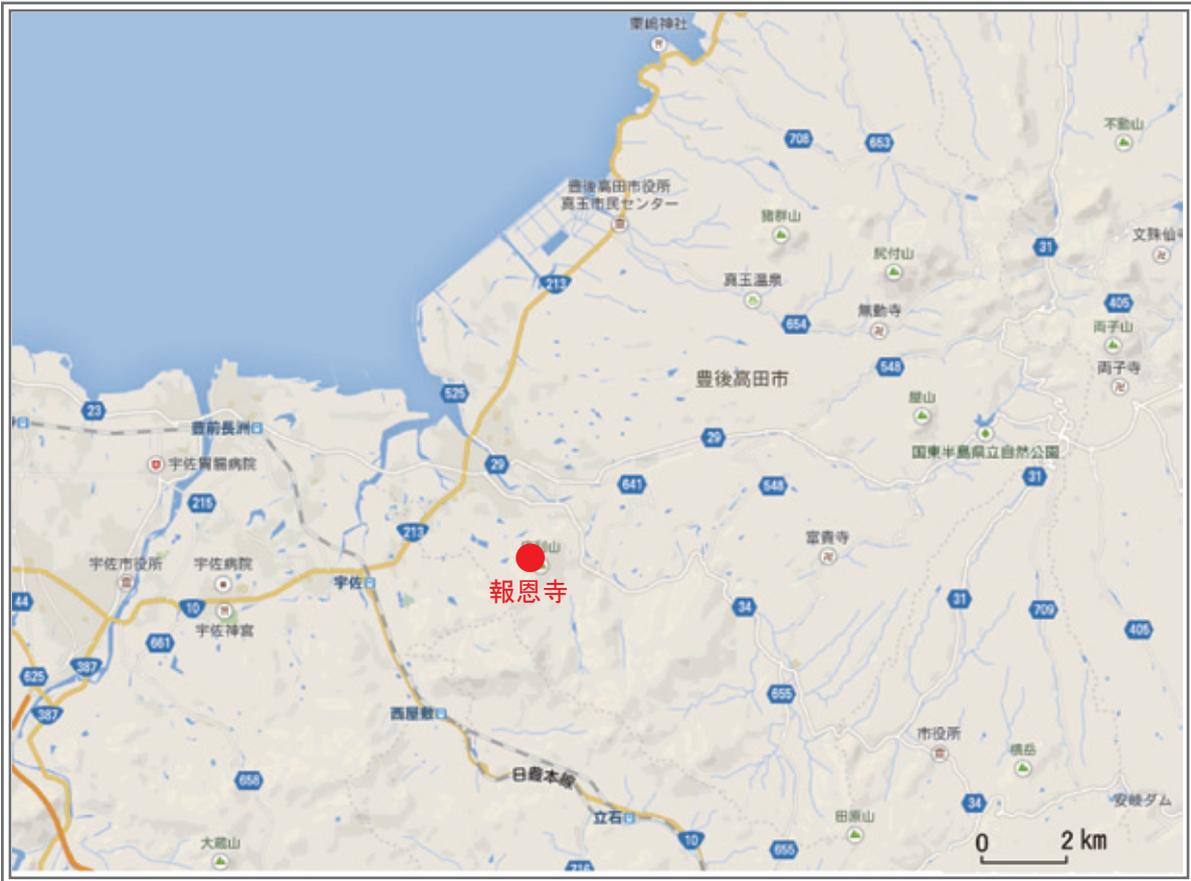
- ・Ⅳ区には、佐野地区からの登山道があった事が知られている。風除権現や旧観音堂が東側又は南側斜面に形成される傾向があるとするならば、佐野地区側から六郷山寺院として形成された可能性も考えられよう。北側からの現参道は、石造物の状況から江戸前期に黄檗派に改宗した段階で整備されたものであろうか。

《主要参考文献》

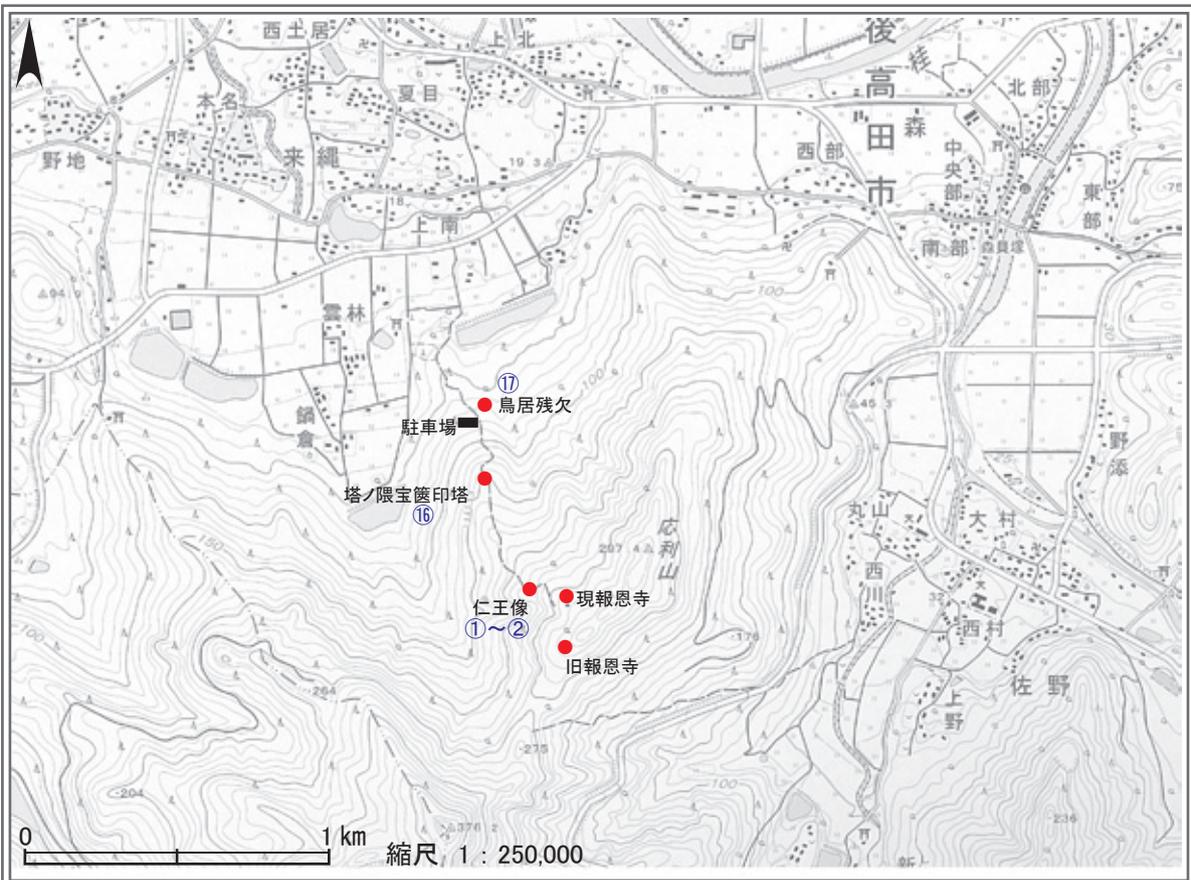
- ・『豊後高田市における六郷山寺院の信仰と経済的考察について・・・地図並写真』 岩野勝 1970
- ・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅰ』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第12集 1993
- ・『くにさきの世界一くらしと祈りの原風景』 豊後高田市史特論編 豊後高田市 1996
- ・『六郷満山の史的・研究 - くにさきの仏教文化 -』 中野幡能 1966

図版① 報恩寺 位置図

市域位置図



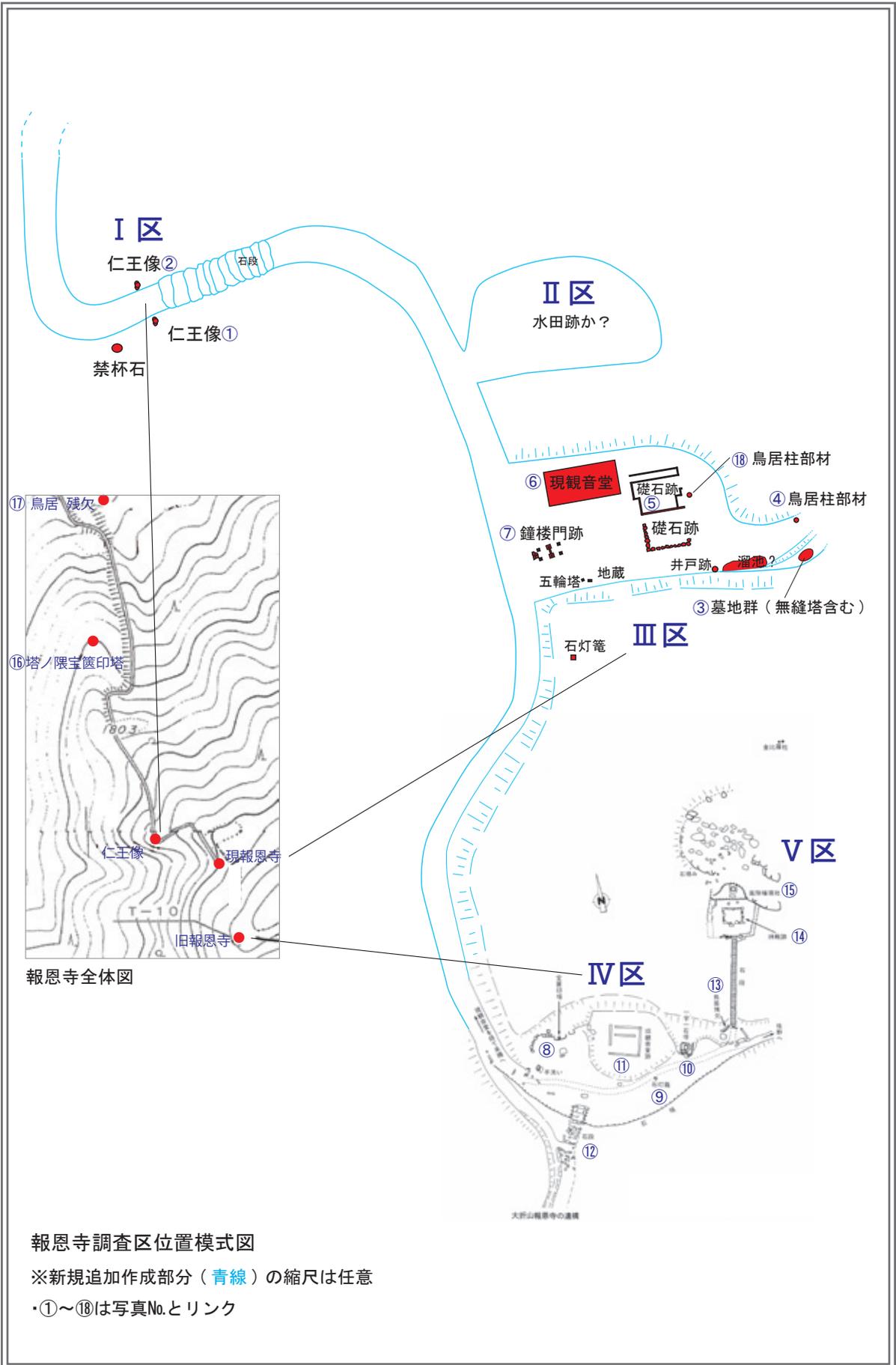
詳細位置図



※番号は写真No.とリンク

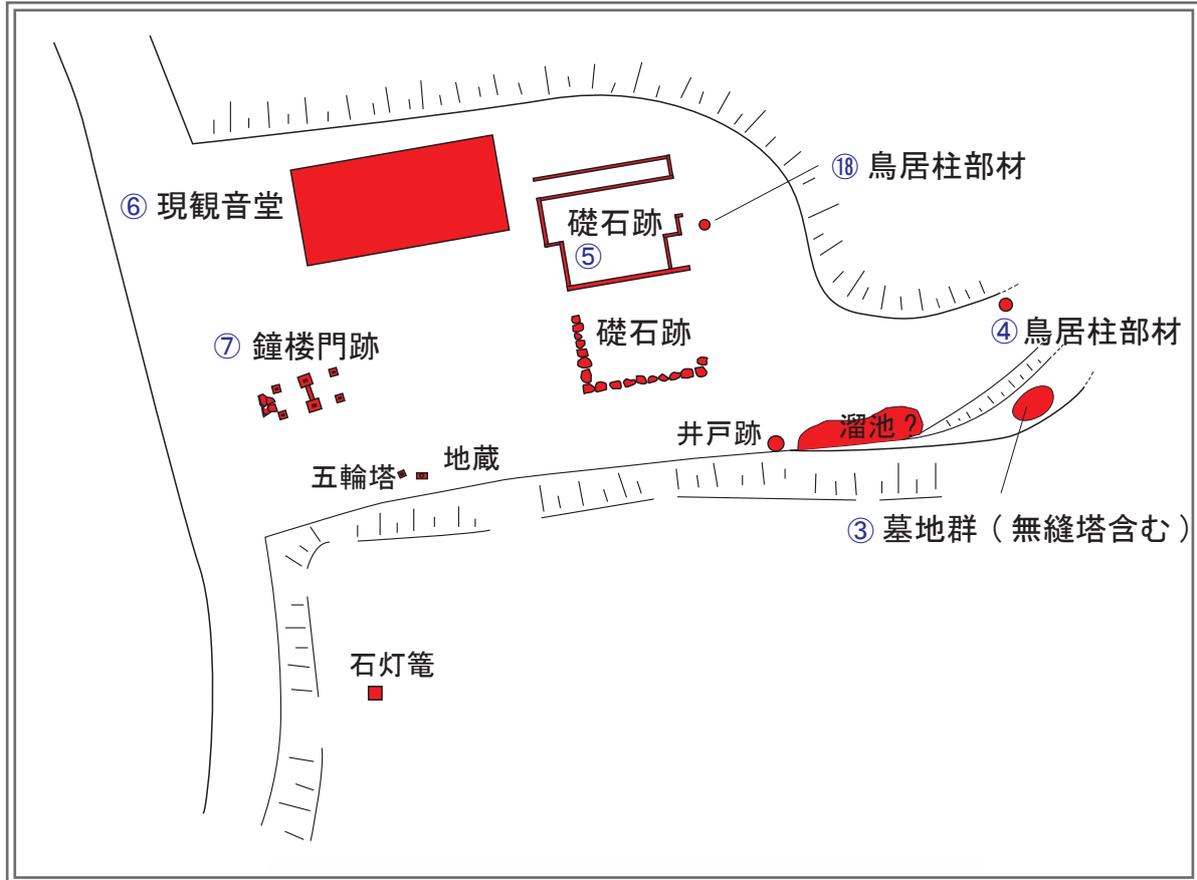
高田地区他

図版② 報恩寺境内地図面



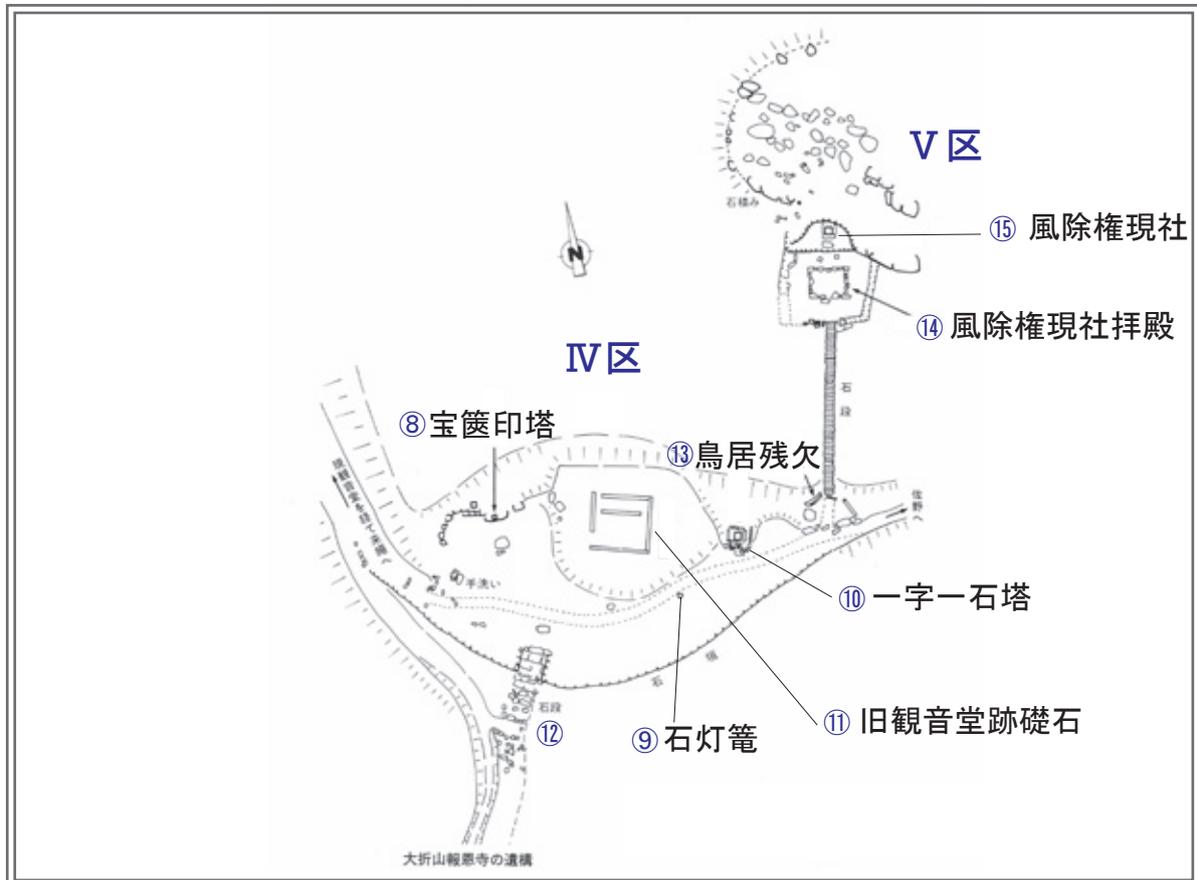
図版③ Ⅲ区模式図・Ⅳ・Ⅴ区拡大図

Ⅲ区模式図



※番号は写真No.とリンク

Ⅳ・Ⅴ区拡大図



※番号は写真No.とリンク

文化財の現況・詳細（1）



1：仁王像（阿形） 図版②参照／時期：享保14年

- ・阿形像は左手に持つ金剛杵を肩に抱え、右手は天衣の一部をつかむような恰好をしている。
 - ・享保十四年（1729）の造立で、石工は熊野村 松本吉左衛門・曾右衛門とある。
 - ・旧山門跡と推定される。
- （豊国の歴史考古学研究 渋谷忠章 2007）



2：仁王像（吽形） 図版②参照／時期：享保14年

- ・右手は肩下にて掌を前に開き、左手は腰の位置で拳となっている。
 - ・阿吽像ともに顔は額に三条の縦シワが表現され、忿怒相というより愛らしい丸顔をした仁王像である。
- （豊国の歴史考古学研究 渋谷忠章 2007）



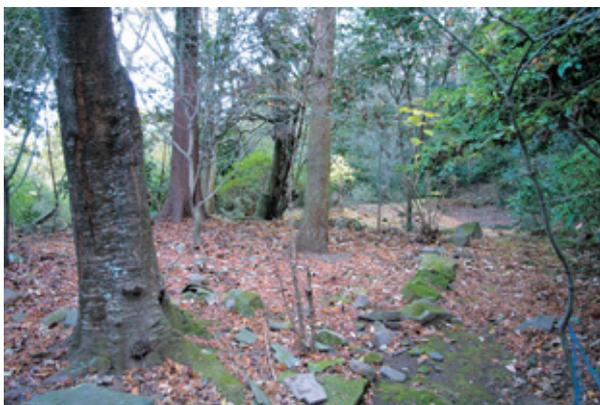
3：院主墓地跡 図版②、③参照／時期：近世～近代

- ・Ⅲ区東側奥に院主墓地が存在しており、古いもので天和三年（1683）の銘が確認できる。新しいものでは昭和銘が確認できるため、おそらく近世～近代の墓地群と考えられる。周辺は斜面に小規模の平坦面が段々畑のように形成されており、坊跡の可能性も残る。



4：鳥居柱部残欠 図版②、③参照／時期：－

- ・院主墓地の北側で鳥居柱部残欠を確認した。後述する、現参道入り口付近の鳥居残欠部材との関係は不明である。
- ・部材の直径は約26.4cmを測る。



5：礎石跡 図版②、③参照／時期：近世か

- ・以前建物があった可能性が考えられるが、詳細は不明である。周辺に、近世陶磁器が一定量散布しているため、近世時期に何かしらの施設等が存在していた可能性が考えられる。



6：現観音堂 図版②、③参照／時期：大正8年以降

- ・1970年の記録写真と比較すると、屋根が茅葺から瓦屋根に改築されている。
- ・観音堂が建てられる以前に、建物等の施設があった可能性はあるが、記録には残されておらず、不明である。
- ・現在、観音堂内に木造十一面観音立像や神功皇后の塔（位牌形）などが安置されている。

文化財の現況・詳細 (2)



7: 鐘楼門跡

図版②、③参照/時期: -

- ・現在では、礎石を残すのみである。以前の調査記録写真では、建物が現存している写真も残されているが、どの段階で倒壊もしくは撤去したのかは不明である。



8: 石祠・宝篋印塔

図版②、③参照/時期: 近世か

- ・石祠については、板石を積み上げた上段に祀られている。
- ・宝篋印塔は、1 m程の巨石の上段に安置されている。相輪部分を欠損しており、ちょうど折れている部分より、先の相輪部材が塔の脇に置かれている。



9: 石灯笼

図版②、③参照/時期: 宝永4年

- ・「奉寄進法華塔前之灯笼 宝永四丁亥年（1708）十一月吉日 賀来氏従者 道雪喜捨」とある。
- ・この石灯笼の火袋部分と思われる部材（写真No10）が、一字一石塔の正面に置かれている。



10: 一字一石塔

図版②、③参照/時期: 元禄12年

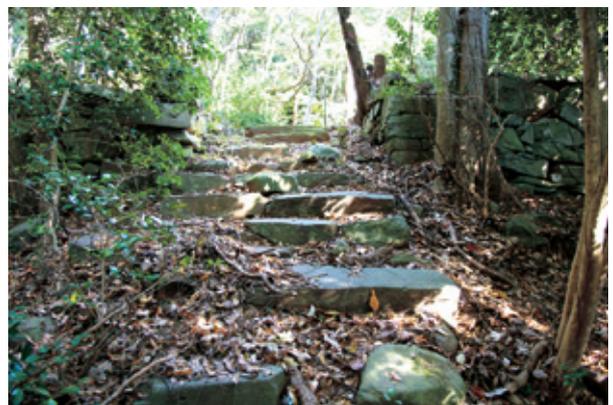
- ・「奉書写 一字一石大乘妙典壹部 元禄十二年（1699）」とある。
- ・長方形の石組で作られた区画の上に存在しており、正面には石灯笼の火袋部分の部材が置かれている。



11: 旧観音堂跡

図版②、③参照/時期: ?~大正8年

- ・大正8年（1919）の火事により消失したものと考えられる。現状では、礎石跡のみが確認できる。
- ・北側の山頂からの落石がやや目立ち、礎石は周辺に比べ一段高くなっている。
- ・6.1m×6.2mの規模の地覆石が確認でき、安山岩の切石を用いている。



12: IV区南側石段・石垣

図版②、③参照 時期: -

- ・石垣及び石段の築造時期は不明であるが、石段が佐野地区側へ下る形で作られているため、おそらく佐野地区側からの参道があった可能性が考えられる。周辺を踏査したが、石造物等な確認できない。
- ・以前は、牛を使って荷物を運搬していたということである。

文化財の現況・詳細 (3)



13: V区鳥居部材残欠 図版②、③参照/時期：-

- ・ 風除権現社へ上がる階段手前に鳥居残欠がある。以前の調査においても確認されており、新たに参道付近で確認された鳥居部材とは別個体である。
- ・ 部材は笠木・鳥木の部材が半分と柱部、台石が確認できる。



14: 風除権現拝殿跡 図版②、③参照/時期：近世か

- ・ 約4m×3m程の範囲で礎石跡が残されている。社側には小型の石灯籠が置かれており、「嘉永五年(1853)」「佐野村 小野勝右工門」の銘を確認することができる。このことから、近世後期にかけては、来縄地区側からだけでなく、佐野地区側からも参道が形成されていた可能性が示唆される。



15: 風除権現社 図版②、③参照/時期：近世以降?

- ・ 拝殿の北側の石垣で形成された段上に風除権現社が立地しており、社手前の水盤には「天保九年(1839) 東浦 □下み□ 田口長右工門」と彫られた銘が確認できる。また、社自体にも文化八年(1812)の銘が確認できる。周辺には、社を区画していたと思われる石垣が現在も残されており、瓦なども大量に残されている。



16: 塔ノ隈宝篋印塔 図版②、③参照/時期：寛文6年

- ・ 寛文六年(1667) 銘が確認できる。銘文が確認できるその他の石造物に比べ、比較的古い段階のものである。
- ・ 周辺は旧参道と考えられ、現在は荒廃している。
- ・ 住職によれば、以前は「七曲」と呼ばれる旧参道がこちら側に存在していたということである。



17: 鳥居残欠 図版②、③参照/時期：-

- ・ 現参道入口から、東側に入り50m~70m程小さな沢に沿って下った地点で鳥居の笠木・鳥木部分と柱部を固定する台石を確認した。山頂の風除権現手前の鳥居部材と比較したが、接合部のサイズが合わず、別個体であることが判明した。
- ・ 聞き取り調査により、正確な場所は不明であるが、周辺に貴船神社が存在していたということであり、それに関連する鳥居部材の可能性が考えられる。



18: 鳥居柱部残欠 図版②、③参照/時期：-

- ・ 銘は残されているが、風化が激しく詳細は不明である。Ⅲ区奥側の写真No.4の鳥居と形状的に類似しているように考えられる。
- ・ 鳥居は写真右側の樹木に沿う形で残されている。

寺院名	神 宮 寺		寺院番号	⑱
所在地	大字奥畑（鞍懸山城跡周辺）			
居住状態	無住	各種文化財 員 数	種 別	個 数
指定文化財			木 造 建 築	
			礎 石 跡 等	
			石 造 物	1
			仏 像	
			美 術 品	
			古 文 書	
	そ の 他			
特筆すべき 文化財	・ 墓碑（時期不明）（写真No.6）			
寺院 管理状況	<p><文化財管理状況及び聞き取り調査概要></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 奥畑集落において、鞍懸山頂への道程について聞き取り調査を行ったが、集落の過疎化に伴い、その正確な道程は不明ということであった。 ・ 田染の空木集落から奥畑集落へと花嫁が嫁ぐ際に、神宮寺周辺を通過して来たという話を聞いた事があるという。また、以前山頂付近において、寺院に関係する石造物等が存在していたかについては、詳しくは分からないということだった。 ・ 登山道及び墓碑を確認したB地点周辺は倒木などにより、荒廃している印象を受ける。 			
寺院史概略	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安貞二年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』に「本山分 鞍懸岩屋、於権現御寶前、二季御祭 五節供等」とあるのが初見である。 ・ 嘉元二年（1304）の『六郷屋山例講谷役配分注文』には、「鞍懸」と記載がある。 ・ 建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』に「-鞍懸山・・・・小田原助入道押領」とある。 ・ 後世の作とされる仁安三年（1168）の『六郷二十八山本寺目録』に「序分本山八箇寺 鞍懸山神宮寺」と記されている。『太宰管内志』には、「鞍懸山は□郷□村にあり今は絶て傳はらず」とあり、『太宰管内志』の『天明年中六郷山寺院名簿』には、「神宮寺在糸永村・・・・大友家ノ田原親貫鞍懸ノ城にたてこもる」とある。 ・ 宝暦五年（1755）の『豊前・豊後六郷山百八十三ヶ所霊場記』には、 「第四十五番 河内村奥畑 鞍懸山 鞍懸山馬頭寺 無住 本尊 観音 所札納 仏坂 鞍懸岩屋 無住 本尊 妙見」 と記載されており、江戸時代に再度六郷山の巡礼の霊場として登場する。この馬頭寺や鞍懸岩屋が近隣のどの岩屋を指しているかは不明である。 ・ 豊田家文書には、「神宮寺ヲ取崩シ鞍懸城トス」とあり、神宮寺と奥畑鞍懸城の位置は同一視できる。 			

寺院現況及び変更点

- ・神宮寺は、現在の鞍懸山の山頂付近に立地していたと推定されている。そのため調査では、鞍懸山山頂付近を調査対象として現況確認調査を行った。以下その内容を報告する。

〈神宮寺現況〉(図版①：詳細位置図参照)

- ・山頂までは、険しい斜面地などを登る必要があり、到達するまでに約2時間程度を要する。今回の現況確認調査においては、図面上のDルートで山頂(写真No.1.2)までを登頂した。山頂付近は、中世山城である奥畑鞍懸城(写真No.3)であり、縄張り図等が大分県教育委員会により報告されている。(『大分の中世城館』第四集総論編 大分県教育委員会 2004)
- ・神宮寺跡の推定地は、山頂から北西側に約50m程移動した、平坦面が形成されている地点と推察されている。(写真No.4) その平坦面は、南北約30m×東西約20mの広さを有しており、山頂へ続く南側以外は、斜面部で形成されている。また、北・東側の斜面地では、小規模な曲輪と思われる平坦面が数箇所残されている。『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ』内で報告されている比定地は、現状では斜面地であり、今回の調査においてはA地点周辺を推定地と判断した。

◎A・B地点

- ・平坦面から北西方向の緩い斜面地で、磁器片を2点表採した。その内1点は、15世紀中頃～16世紀初頭の景德鎮窯系染付皿(B1群Ⅶ)の底部と思われる。この遺物を採取した地点から、岩の露出している斜面を北側へと延びる尾根が存在している。この尾根上も南北に長い平坦面(写真No.5)を形成しており、この中間地点で墓碑と思われる石造物を1基確認した。(写真No.6) 石造物に銘文等は確認できず、時期についても不明である。
- ・今回の現況確認調査では、神宮寺との明確な関係性が認められる遺物や石造物は確認できなかった。また、神宮寺跡と考えられる平坦面も、鞍懸山城に伴う平坦面である可能性が考えられる。その他の六郷山寺院と立地環境を比較すると、山頂付近ではなく、中腹などに立地しているものがほとんどである。このようなことから、本来寺院が立地していたのは山頂からやや下った地点であった可能性が考えられるが、今回の調査ではその確証を得ることはできなかった。
- ・本来の登山ルートと考えられるCルートについては、山腹までは倒壊した近世墓地の残欠などが確認できた。このルートは、山頂付近になると崖面が多く今回は登頂できていない。



遺物出土状況



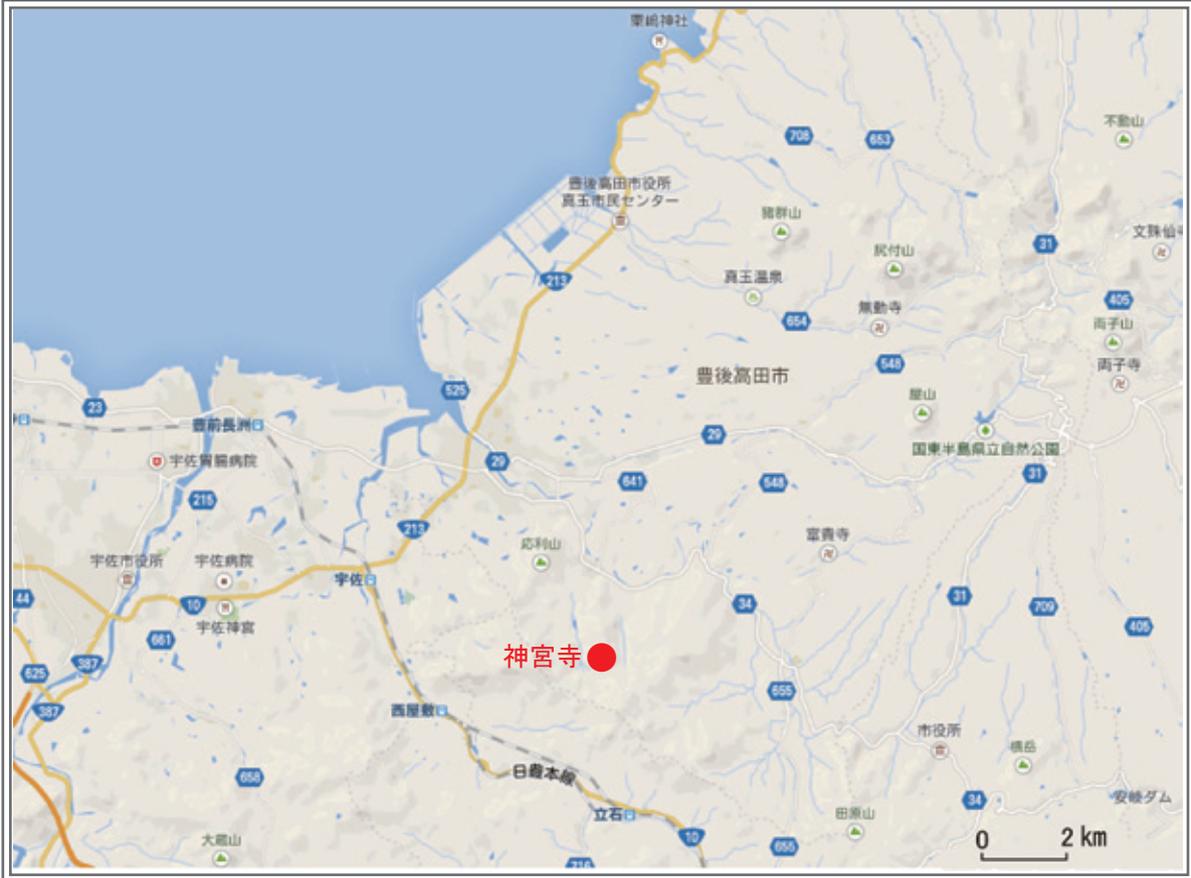
遺物出土状況

《主要参考文献》

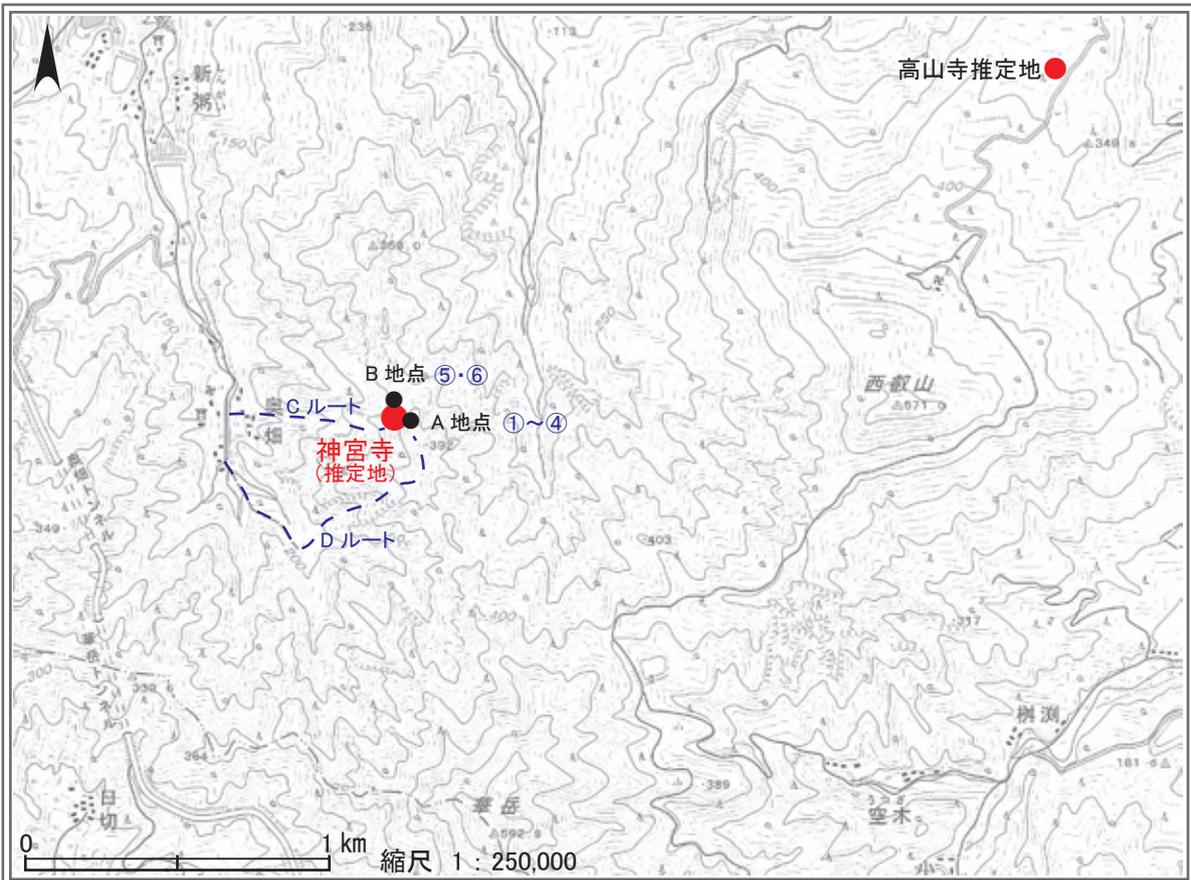
- ・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第13集 1994
- ・大分県文化財調査報告書第170輯 『大分の中世城館』第四集総論編 大分県教育委員会 2004
- ・『[3] 中世後期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器 陶磁器』 續伸一郎 1995

図版① 神宮寺 位置図

市域位置図



詳細位置図



--- 登山道

高田地区他

文化財の現況・詳細（1）



1：鞍懸山山頂

図版①参照／時期：－

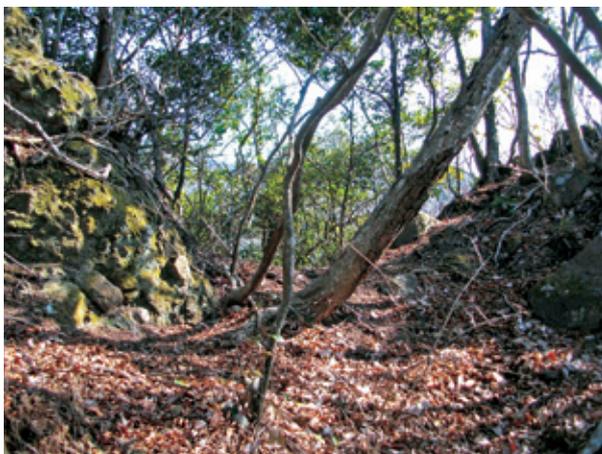
- ・ 山頂は岩肌が露頭しており、石造物などは確認できない。
- ・ 山頂から北西方向において、奥畑鞍懸城の遺構と考えられる堀切りがみられる。



2：山頂からみた奥畑集落

図版①参照／時期：－

- ・ 山頂から西側には、奥畑の集落を望むことができる。



3：鞍懸城跡堀切り

図版①参照／時期：－

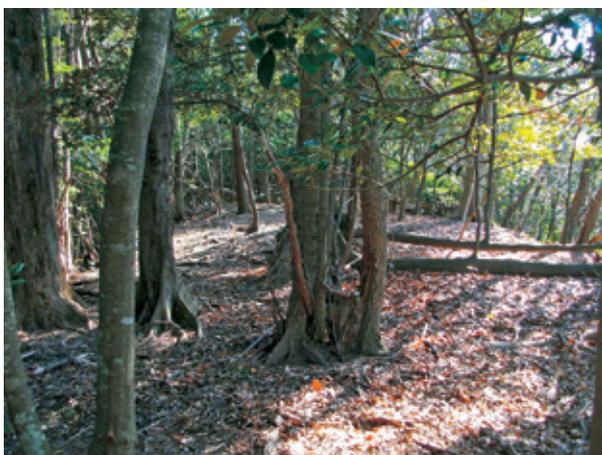
- ・ 山頂とA地点の間に堀切りが残る。



4：A地点

図版①参照／時期：－

- ・ 山頂より北西側において600m程の平坦面が存在している。建物が存在したのであれば、この地点周辺が想定される。



5：B地点

図版①参照／時期：－

- ・ A地点より北西側へ下ると、南北の尾根上に延びる平坦面が存在している。写真No.6の墓碑と思われる石造物が存在している。



6：墓碑

図版①参照／時期：－

- ・ B地点において墓碑と思われる石造物を1基確認した。銘文などは確認できなかった。

寺院名	光明寺		寺院番号	⑬
所在地	大字田福			
居住状態	有住	各種文化財 員数	種別	個数
指定文化財			木造建築	1
			礎石跡等	
			石造物	2
			仏像	5
			美術品	
			古文書 その他	
特筆すべき 文化財	・山門（写真No2）	・無縫塔群（写真No8）		
	・石造物群（写真No9）	・菩薩形立像（写真No11）		
	・地藏菩薩立像2軀（写真No11）	・毘沙門天立像（写真No11）		
	・十一面観音坐像			
寺院 管理状況	<p><文化財管理状況及び聞き取り調査概要></p> <ul style="list-style-type: none"> ・境内は、住職により管理されており、仏像なども近年建て直された本堂内に安置されている。 ・写真No10の堂宇跡に関して、住職に聞き取り調査を行ったところ、昭和30年頃に道路工事が行われる前までは、旧道の形が残されていたということである。また、堂宇があった明確な記憶はないが、堂宇推定地の標高が周辺に比べ一段下がっている点や、旧道が堂宇に向かって直線的に延びていたことなどから、何らかの施設が存在していた可能性が残る。（光明寺跡か） ・この堂宇推定地から南側へ一段下がった地点には、道路工事以前には墓碑が存在しており、その他、峯入りの際に使用されたとされる「ワング」と呼ばれる人工的な横穴が存在していたということである。また、近くに湧水地もあったということである。 ・堂宇に安置されていたとされる菩薩形立像（平安仏）については、周辺住民の方々からは薬師様と呼ばれ目の病に効くと言われていたそうである。 			
寺院史概略	<ul style="list-style-type: none"> ・建武四年の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』の中に本山末寺として「光明寺 限東美尾 限西馬渡 限南尾立 限北尾立」と記載されるが、中山末寺の項にも「光明寺」との記載がみられる。 ・仁安三年（1168）の『六郷二十八山本寺目録』には「中山分末寺 多福院光明寺」とある。また『太宰管内志』所収の「六郷山定額院主目録」には「峯岑山光明寺院主多福院佛田共十二箇所」と記載されている。宝暦二年（1752）前後とされる『六郷山本紀廿八山本末之記』には「玉井山光明寺」と記載される。 ・田染の河野家文書の『水鏡』（天保八年）には、「田福村玉井堂二而行者揃、右堂之下川二而垢離ヲ取頭巾揃有之」とあり、田福の玉井堂より峯入りが開始されたと記されている。玉井堂は、玉井山光明寺を指すと思われるが、その表記から江戸時代すでに堂宇のみとなっていたと思われる。昭和56年の調査では、現多福院の西側にその跡地があり、井戸が残っており「タマンド（玉の井戸）」と呼ばれていたと報告されている。この小堂に祀られていた菩薩形立像は、現多福院に移されている。平安時代の作であり、光明寺に由来するものではと推測されている。 ・現在の豊田山多福院については、曹洞宗の寺院である。『西国東郡誌』では、応永元年（1394）に融徹及び川野元信を開基として寺院を興したという。光明寺は中世段階で廃絶したものであろうか。 			

寺院現況及び変更点

- ・光明寺については、現在残る多福院の①本堂・境内周辺、②墓地群、③その他周辺地域、④発掘調査の四つに大別し報告する。

〈①本堂、境内周辺〉(図版②:多福院光明寺現況図参照)

- ・山門(写真No.2)・本堂(写真No.3)・鐘楼(写真No.4)に関しては以前と比較しても大きな変更点はみられない。山門については、220年～250年程前に火災に見舞われた際に、一時は解体していたものを、使用できる部材を選び現在の山門として建て直したということである。その際に、柱部材に「東門」と書かれていたという事であり、以前は東側に山門が存在していたものと考えられる。
- ・山門と本堂の間に萬人塔と呼ばれるピラミッド型の石造物があるが、境内図にも記載されており大きな変更点はないものと思われる。本堂向かって左側に本堂再建碑1基・供養塔3基の計4基と石仏1軀、手水鉢1基が位置しており図面上に追加した。
- ・本堂裏の西側で観音堂(写真No.5)及び現代墓を確認し、図面上に追加した。観音堂と現代墓の間には、小規模な石段上に墓碑や石祠・石幢の部材・石造仏(不動明王像等3軀)が安置されている。(写真No.6)石祠内には、相輪の残欠が置かれていた。これらの石造物群も図面上に追加した。

〈②墓地群〉(図版②:多福院光明寺現況図参照)

- ・本堂裏側の観音堂の西側に、現代墓が南北方向に並んで展開している。
- ・現代墓の北側には、元禄戊辰(1688)銘の板碑型墓碑などが、7基南北方向に一直列に位置している。(写真No.7)
- ・7基が並んだ墓碑の北側に位置する1段高くなった段上に、25基程の無縫塔が整然と並んでいる。(写真No.8)無縫塔には弘化三年(1846)の銘などが確認できるため、基本的には近世代の多福院の院主墓碑と考えられる。
- ・無縫塔群の北側には宝塔5基・板碑・五輪塔・一石五輪塔・相輪の残欠等の多数の石塔物が集積されている。(写真No.9)宝塔の中には、無縫塔の台座を笠部材として使用しているものなどがある。石造物の時期については、中世末であろうか。
- ・無縫塔群の西側にも墓地群が展開している。墓碑の中には、元禄の銘が確認できるものもあり、近世～近代の墓地群と考えられる。(図面:近世～現代墓①、近世～現代墓②で表記)また、墓碑の個数が膨大なため、今回、図面上では破線でおおよその範囲を設定し記載した。

〈③その他周辺地域〉(図版②:多福院光明寺現況図参照)

- ・1999年報告の図面において小堂宇跡(推定)(C地点)とされている地点について現況確認を行った(写真No.10)が、その痕跡は確認できなかった。このC地点の堂宇に安置されていた菩薩形立像は、現在多福院本堂に移されている。高さ約1mで、平安時代の作である。(写真No.11)また、以前の参道と思われる多福院南東側の小道(B地点)についても、大きな変更点はみられない。
- ・周辺の住宅地や旧参道と考えられる小道を踏査したが、石造物などは確認できなかった。

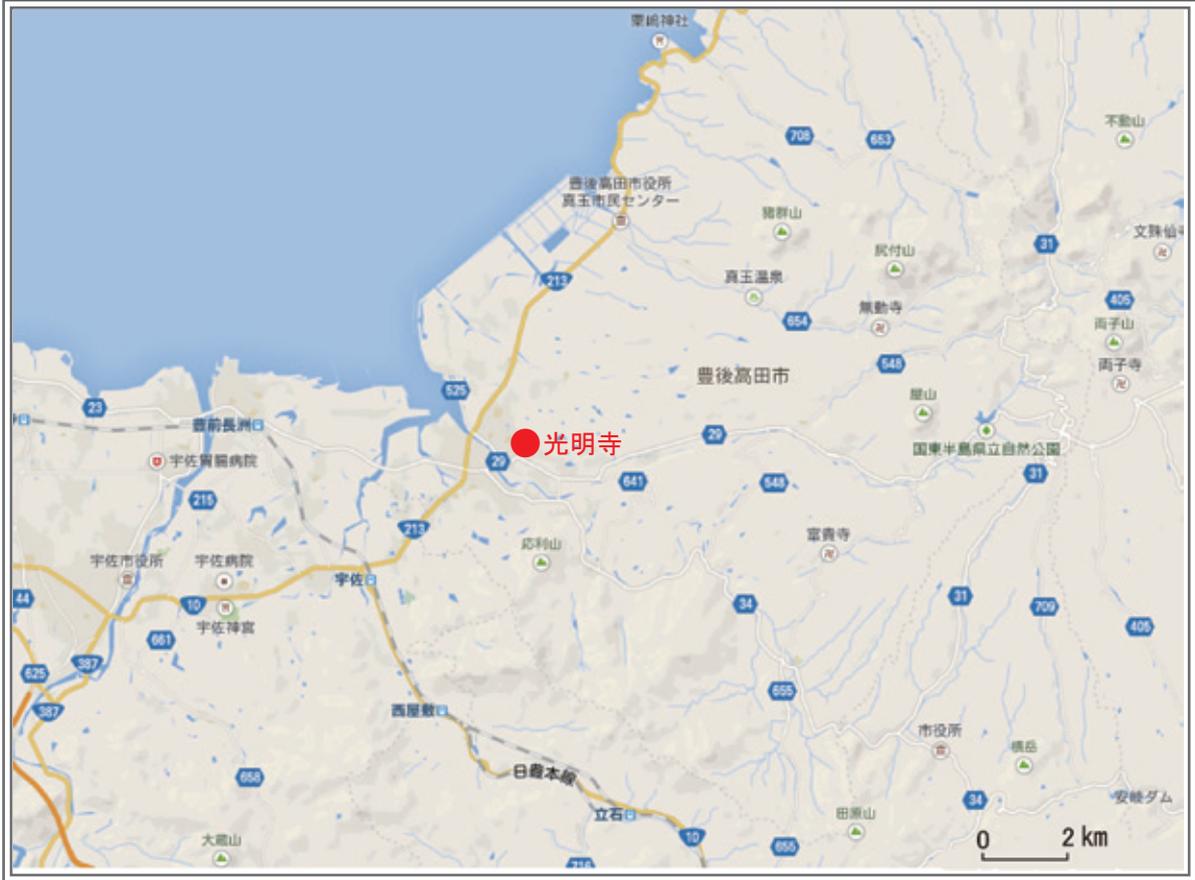
〈④調査区周辺〉(図版②:多福院光明寺現況図参照)

- ・平成10年度に光明寺西側の畑地で発掘調査が行われている。(写真No.12)1～4号のトレンチが設定され、遺物としては土師器皿・龍泉窯系青磁碗・瓦器椀・無頸陶器等が出土しており13～16世紀代が中心となると報告されている。現在も畑地であり、以前の写真と比較しても、大きな変更点は確認できない。

〈主要参考文献〉

- ・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅶ』大分県立歴史博物館調査報告書第4集 大分県立歴史博物館 1999
- ・『歴史の道調査報告書 峯入りの道』大分県教育庁管理部文化課 1981
- ・『宇佐国東の寺院と文化財』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第8集 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

図版① 光明寺 位置図
市域位置図

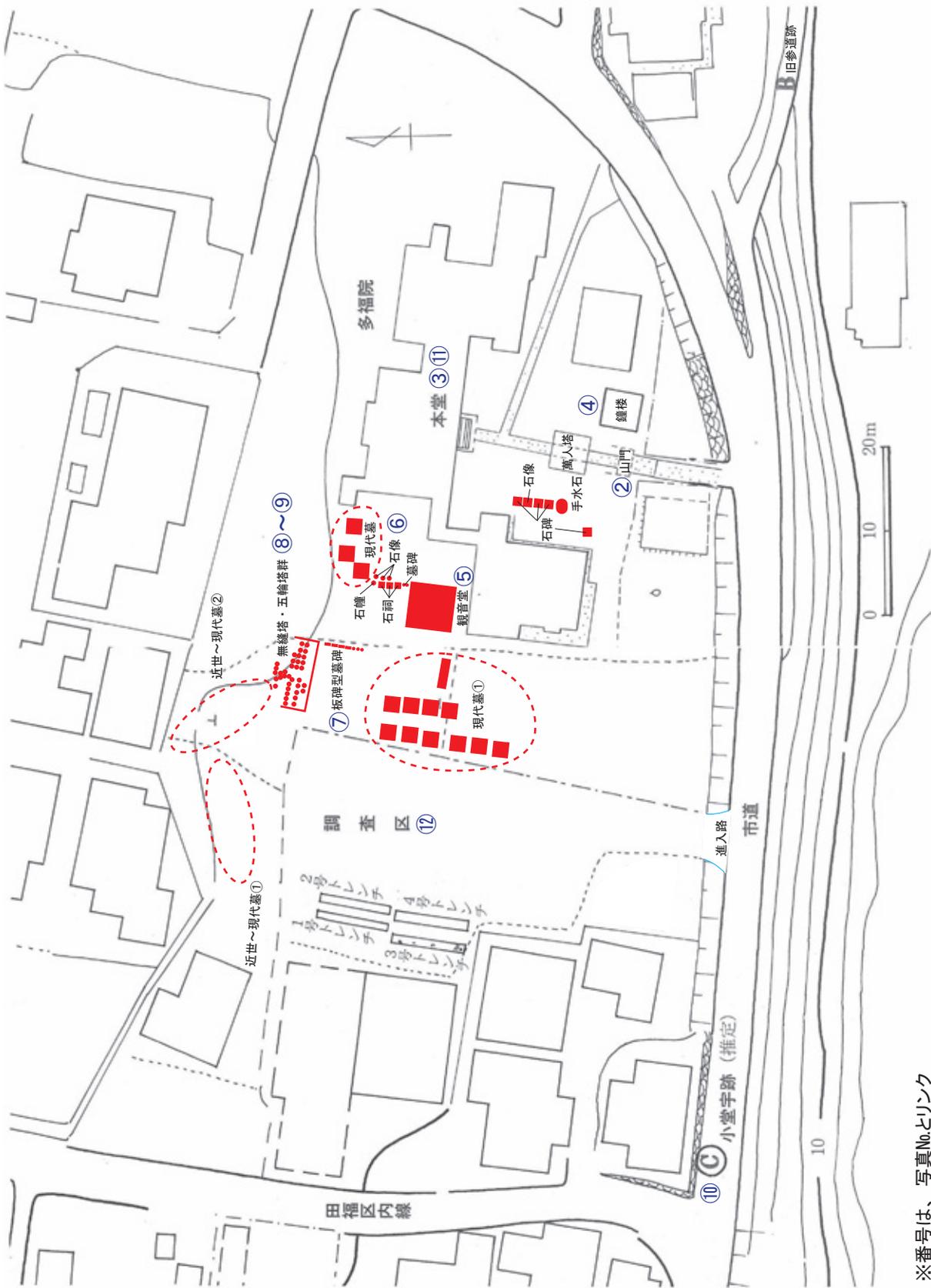


詳細位置図



※番号は、写真No.とリンク

図版② 光明寺現況図



多福院光明寺現況図

※番号は、写真No.とリンク

文化財の現況・詳細 (1)



1:多福院（光明寺）全景 図版②参照／時期：現代

・境内には山門・本堂・庫裡・観音堂・鐘楼が配置されている。



2:山門 図版②参照／時期：近世～現代

・「豊田山多福院」と掲げられる。
・220年～250年程前の火災に見舞われるまでは、東門として機能していたものと考えられる。



3:本堂 図版②参照／時期：現代

・山門と本堂の間にピラミッド型の万人塔が位置している。



4:鐘楼 図版②参照／時期：現代

・山門を過ぎて右側に位置している。



5:観音堂 図版②参照／時期：現代

・庫裡の北側に位置している。
・堂内には観音像を安置している。



6:石造物群 図版②参照／時期：近世

・石祠や相輪残欠・不動明王像等が見られる。

文化財の現況・詳細 (2)



7: 近世墓碑

図版②参照/時期: 元禄年間

- ・元禄年銘の板碑型墓碑が一行に並ぶ。



8: 無縫塔群

図版②参照/時期: 近世

- ・江戸時代以降の多福院院主の墓地である。



9: 石造物群

図版②参照/時期: 中世～近世

- ・中世末から近世のものか。
- ・五輪塔・無縫塔の部材が集積されている。
- ・現住職で三十代目ということであり、それ以前の歴代住職の墓地の可能性が考えられる。



10: 堂宇跡 (C地点)

図版②参照/時期: -

- ・この付近に小堂が位置していたということである。安置されていた菩薩形立像(平安仏)は、現在多福院内の本堂に安置されている。
- ・光明寺跡地の可能性が残る。



11: 菩薩形立像

本堂内/時期: 平安～室町

- ・厨子内の菩薩形立像はC地点の小堂に安置されていたものである。室町期の作と報告されていたが、渡辺文雄氏から形態的特徴から平安時代まで遡るものと御教示を得た。『宇佐国東の寺院と文化財』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第8集 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
- ・菩薩形立像の両脇には、地藏菩薩立像や毘沙門天立像が安置される。すべて室町期の作である。
- ・風化が著しいが、木造仏も2躯ほど安置されており、近世よりも時期的に古いものと推定される。



12: 調査地点

図版②参照/時期: -

- ・4本のトレンチを設定している。
- ・13～16世紀にかけての遺物が出土している。

寺院名	来迎寺		寺院番号	⑳
所在地	大字玉津			
居住状態	無住	各種文化財 員数	種別	個数
指定文化財			木造建築	
			礎石跡等	
			石造物	
			仏像	
			美術品	
			古文書	
その他				
特筆すべき 文化財				
寺院 管理状況	<p><文化財管理状況及び聞き取り調査概要></p> <ul style="list-style-type: none"> 来迎寺の所在地として、豊後高田市玉津の旧高田城周辺が想定されている。そのため、該地域周辺において踏査及び聞き取り調査を行った。しかし、明確な寺院跡に関連する遺構や石造物は確認できなかった。 			
寺院史概略	<ul style="list-style-type: none"> 建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』では「高山ノ末寺也、限東ノウヘノ谷 限西シテノ大道 限南高田河 限北草地ノ堺」とある。四至として記載される東の「ノウヘ」は現在の野部、西の「シテ」は志手、南は桂川、北は草地であり、これらの範囲は現在の桂陽小学校等が位置する台地上となる。また、その寺領は小田原助入道によって押領されていると記載されている。 『豊後高田市史』では来迎寺について「草創については不明であるが、その名称から浄土信仰を意識した寺であり、阿弥陀堂を伴う寺であったと推定されている。また、それを営む勢力として来繩郷に関わる郷司等の神官勢力の氏寺的なものであった可能性が高いが、鎌倉時代末に宇佐宮や弥勒寺というスポンサーを失った典型的な没落寺院」ではと推測されている。 『六郷山定額院主目録』には「無量山来迎寺院主寶宅院高山ノ末徒也」の記載がある。 仁安三年の『六郷二十八山本寺目録』に「本山分末寺 海見山来迎寺云々」と記載される。 			

寺院現況及び変更点

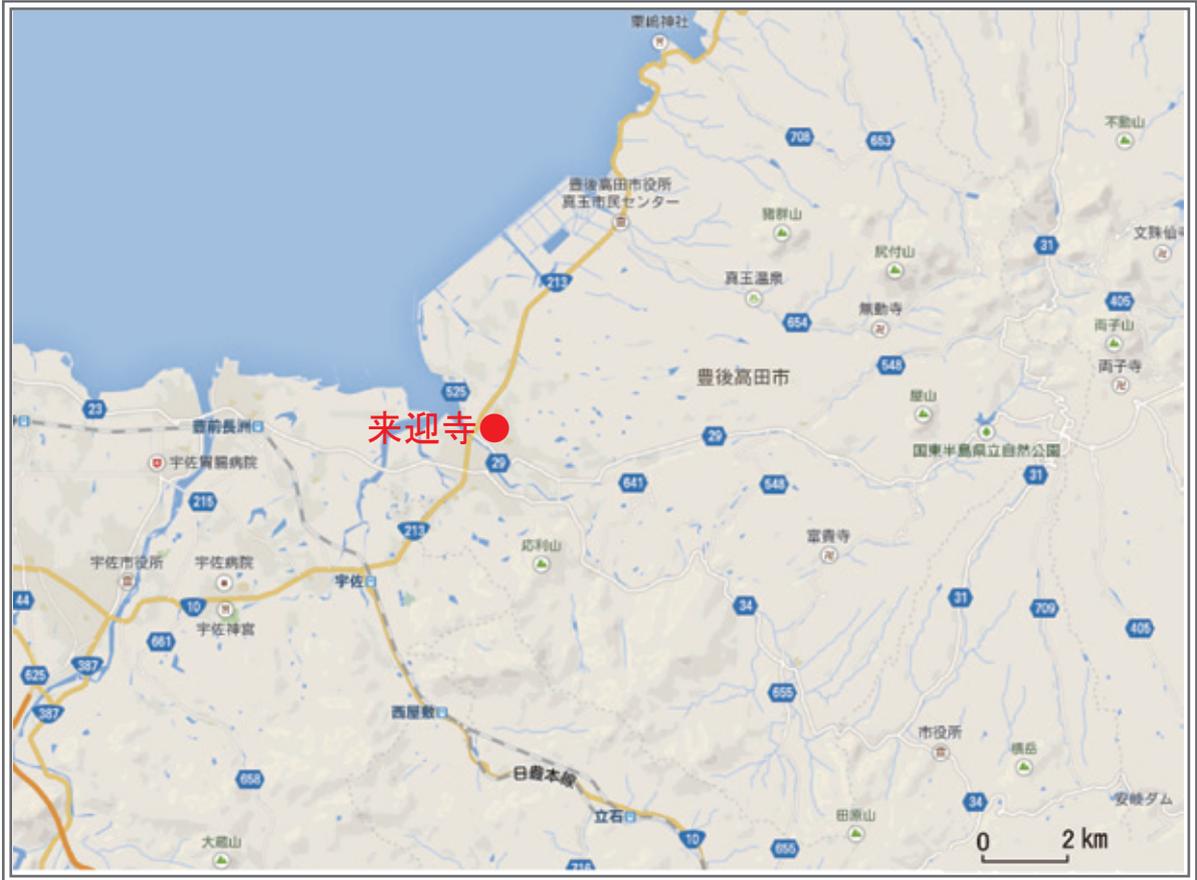
- ・1999年の大分県立歴史博物館による確認調査では、来迎寺は所在地の想定に止まっており、明確な遺構・石造物は確認されていない。よって、平成25年度の調査では、想定地内に立地する社・堂である琴平宮及び山神社を調査対象と設定した。
- ・琴平宮（金毘羅宮）は、高田城外堀の北東隅に位置している。（写真No.1）約500㎡の敷地内には、鳥居・拝殿・本殿・観音堂（写真No.2）がみられる。鳥居には安永三年（1773）の銘が残る。石造物は拝殿前に石灯籠が2基、本殿と観音堂の間に石祠が1基、観音堂入口に手水鉢が1基存在する。
- ・琴平宮敷地内の楠は県指定特別保護樹木・市指定の天然記念物であり、良好な状態を保っている。
- ・観音堂内には木造十一面観音坐像・石造観音菩薩坐像・石造弘法大師坐像が安置されている。
- ・琴平宮から北へ向かった道沿いに、石祠や石灯籠の脚部等4基程の石造物の集積を確認した。来迎寺との関係は不明である。（写真No.3）
- ・桂陽小学校の西側、民家の裏に蟹家堂という小堂が存在しており、そこを来迎寺に関連するとしている。当時、堂はかなり荒廃しており、今回も推定地周辺を踏査したが、竹林の中に倒壊した廃屋と瓦などを確認したが、蟹家堂であるという確証は得られなかった。（写真No.4）
- ・県立高田高校の西側に志手町の山神社が位置している。その境内に一石五輪塔が集積され、祀られている。（写真No.5）今回の調査で確認できた中世の石造物は、この地点のみであり、寺域に関する新たな知見は得られなかった。

《主要参考文献》

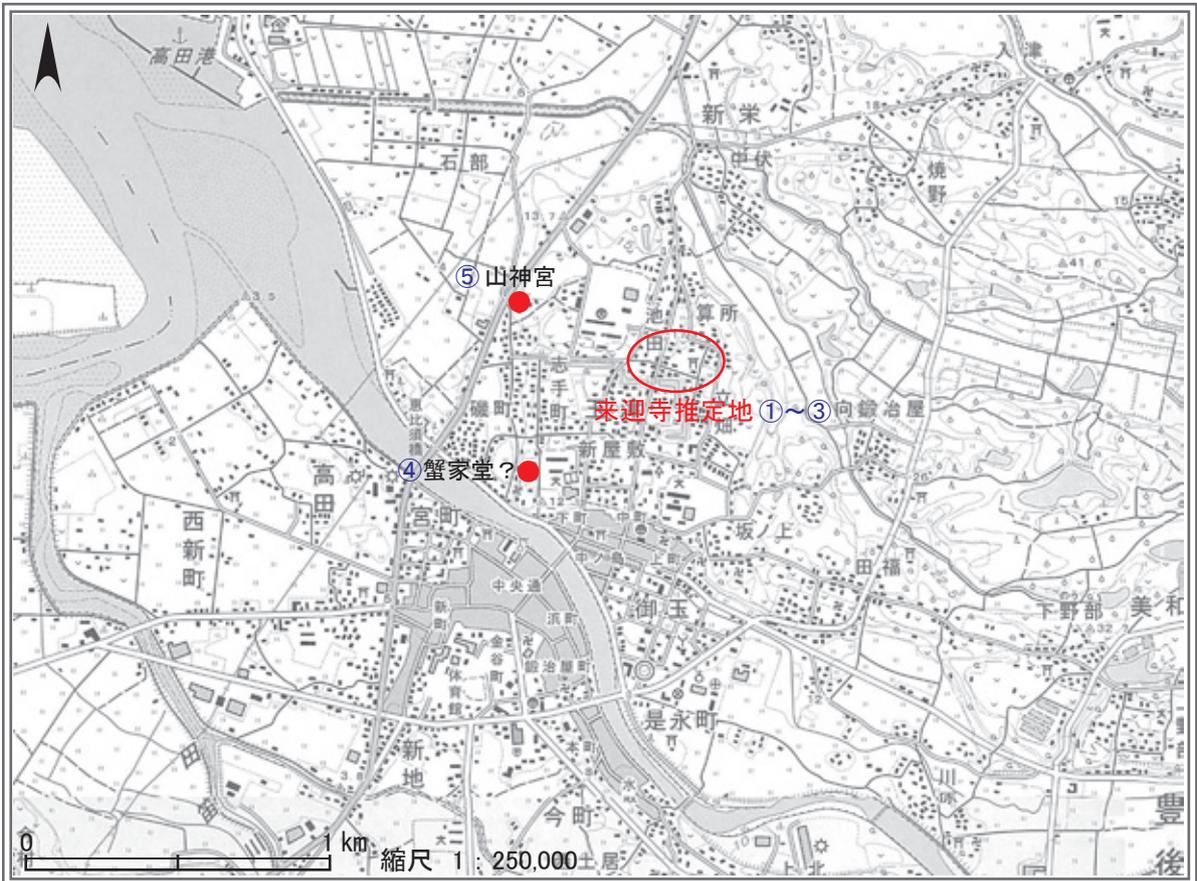
- ・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅶ』 大分県立歴史博物館調査報告書第2集 大分県立歴史博物館 1999
- ・『豊後高田市史通史編』 豊後高田市 1998
- ・『歴史の道調査報告書 峯入りの道』 大分県教育庁管理部文化課 1981

図版① 来迎寺 位置図

市域位置図



詳細位置図



※番号は、写真No.にリンク

高田地区他

文化財の現況・詳細（1）



1：琴平宮全景

図版①参照／時期：－

- ・来迎寺の想定地内に位置する。
- ・鳥居・拜殿・本殿・観音堂がみられる。鳥居には安永三年（1774）銘が残る。



2：堂宇

図版①参照／時期：－

- ・本殿の右側に位置している。
- ・室内には木造十一面観音坐像・石造観音菩薩坐像・石造弘法大師坐像が安置されている。



3：石造物群

図版①参照／時期：－

- ・琴平宮から北へ向かった突き当りの道沿いに、石祠・石灯籠脚部等4基程の石造物を集積している。
- ・来迎寺との関係は不明である。



4：蟹家堂か

図版①参照／時期：－

- ・桂陽小学校西側の民家の裏側に蟹家堂という小堂が位置しており、来迎寺に関連するとされている。
- ・竹林の中に倒壊した廃屋の部材と瓦類を確認したが、蟹家堂であるという確証は得られていない。



5：山神社境内五輪塔群

図版①参照／時期：中世

- ・県立高田高校の西側に志手町の山神社が位置している。その境内に一石五輪塔が集積されている。